

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 7 月 3 日現在

機関番号：32725
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2013～2015
 課題番号：25770071
 研究課題名(和文) 相撲浮世絵の研究 寛政期以降の展開を中心に

研究課題名(英文) A Study of Sumo Ukiyo-e from the Kansei Era

研究代表者

大久保 範子 (Okubo, Noriko)

横浜美術大学・美術学部・助手

研究者番号：80620252

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本課題は天明～寛政期に勝川派によって確立された相撲浮世絵の展開について研究を行うものである。勝川派の粗である勝川春章は、役者絵で培った似顔表現を元にしつつ独自の様式で勸進相撲の力士を写実的に描き出したが、春章が相撲絵の制作から退くと、客観性の高い描写は次第に定型化へと向かう。天明末期以降は、春章の高弟である春好、春英が制作を先導したが、寛政期を過ぎる頃には体躯描写が誇張されるようになり大型化した。また、作品数は増加したものの、構図や様式に創意は見られなくなる。同時期の役者絵との比較からは、相撲絵に購入者が求めたのは美しさよりも力の象徴でもある逞しい体躯表現にあったと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on examples of surviving sumo-e from the Katsukawa school, and research the processes through which sumo-e from the Tenmei and Kansei eras onwards acquired their distinctive style and form of expression. Katsukawa Shunsho depicted sumo wrestlers in a realistic manner, and executed his sumo-e in a style quite distinct from his yakusha-e. After Shunsho stopped composing sumo-e, these objective, nuanced depictions were gradually replaced with more stereotyped forms. From the end of the Tenmei era onwards, two of Shunsho's leading pupils, Shunko and Shun'ei, led production of sumo-e at the school. From the Kansei era onwards, the muscular protrusions of the wrestlers became more exaggerated. However, despite the large number of pictures they produced, there were few signs of originality in either composition or style. Compared with yakusha-e, what was demanded of sumo-e was not a beautiful visage, but the sense of power exuded by a gigantic physique.

研究分野：美術史・芸術学

キーワード：浮世絵 相撲絵 江戸 勸進相撲 錦絵 勝川派

1. 研究開始当初の背景

相撲絵は、著名な絵師が活躍した浮世絵の黄金期(天明～寛政年間)から幕末・明治期にかけ、多数の作品が継続的に描かれたにもかかわらず、役者絵・美人画などとは異なり、画題としての成立や展開について焦点が当てられることはなかった。事前調査の結果、本格的な研究がみられなかった要因としては次の2点が考えられた。

- (1) 単独の画題としてではなく風俗画題の一部として看做されていた
- (2) 人物画としての表現が役者絵と同列であると考えられていた

つまり、これまで相撲絵は人物画と風俗画双方の分野にまたがる分野であったために、双方の観点から十分な検討がされないまま研究対象として見過ごされてきたといえる。

しかしながら、申請者によるこれまでの調査の結果、相撲絵には単なる風俗画題の一部としては説明が困難なほどの構図・様式等の多様性があり、手がけた絵師たちが意識的に「相撲絵にふさわしい様式」を創出しようと試みていたことがうかがえた。特に天明～寛政期において制作が本格化するとともに、写貌・体躯表現の両面で表現が高められ、典型となる様式が成立した時代であると考えられたため、今後の研究では寛政期以降、相撲絵がどのような展開を示したのかについて検討を行う。

2. 研究の目的

本研究は相撲浮世絵の学術的価値を、絵画資料と文字資料(文献・番付等)を組み合わせることで明らかにすることが目的である。江戸の娯楽として四民に親しまれた勸進相撲が画題としてどのように展開したのかを検討することで、従来の浮世絵研究に新たな一面を提示できるものとする。課題の特色・意義としては以下の2点に着目し研究を進める。

(1) 絵画資料・文献資料からのアプローチ

現在の浮世絵研究は、絵画資料に基づく様式面からの検討が主流だが、本研究は現存する相撲に関する記録文献を積極的に活用する。特に番付や勸進相撲での対戦記録は、作品の制作年を客観的に特定する上で非常に有効であり、同時代に制作された役者絵等の作品とも比較することで、絵師がどのように相撲絵制作に向き合っていたのかに関する影響関係の一端を明らかにすることが可能になると考える。このことは、相撲絵に新たな資料的価値を示しうるものであり、浮世絵

研究に新たな一面を加えるという意義を持つと考える。

(2) 国内、及び海外へ向けた伝統文化の発信
本研究は、日本を代表する伝統文化のひとつである相撲を、美術の面からアプローチすることで、文献中心の研究とは異なる、視覚を通じた明快な研究成果の提示が可能になると考える。

3. 研究の方法

以下(1)(2)に研究の具体的な方法、～④に着目するポイントを挙げる。

(1) 作品に関するデータ収集

- ・国内外の作例の収集
- ・制作に関与した絵師に関する記録及びデータ収集
- ・勸進相撲に関する記録及びデータ収集
 - ・番付・勝負附
 - ・興行の記録(地方巡業含む)
 - ・描かれた力士に関する記録など

(2) 上記(1)の基づく考察

- ・作品の年代別の整理
- ・相撲絵の作例の中での位置づけ

文化期から文政期にかけての展開

- ・勝川派から歌川派への展開
- ・作画量の増減
- ・構図や形式などの様式の変化

勝川派末期～歌川派初期の絵師による相撲絵のデータ収集・記録化

- ・勝川派末期の絵師による作品の整理(後期の勝川春英、勝川春亭など)
- ・初期歌川派の絵師による作品の整理(初代歌川豊国、豊重(2代豊国)、国貞(3代豊国)など)

勝川派～歌川派への様式展開

- ・両派の表現・構図・形式等の様式にみられる共通点と相違点の明確化
- ・同一の絵師が手がけた役者絵・武者絵等の他の人物画との比較

社会的背景とのかかわり

- ・江戸の文化面での流行が与えた影響(構図、画題、力士と他の人物との取り合わせ等)
- ・幕府の浮世絵及び庶民風俗に対する禁令が相撲絵に与えた影響
- ・勸進相撲の動向と作画量の変化についての考察。
- ・同時代の他の浮世絵分野との比較

4. 研究成果

(1) 平成 25 年度

初年度にあたる平成 25 年度は、寛政期以降の勝川派の絵師による相撲絵の全体的な展開を把握するための調査を集中的に行った。特に注目したのは、寛政期以降勝川派の相撲絵を主導した春英の作品である。相撲博物館を中心とした調査の結果、春英は短期間のうちに様式が変化し続けたことが確認されたが、さらにその要因を探るため天明期から文政期にかけての相撲絵を年代順に分類し、番付や興行記録をもとに検討を加えた。

平成 25 年度は、9 月にイギリスの大英博物館およびスコットランド国立博物館で調査を行い、作品データの収集・拡充を行った。研究・調査結果の一部は、平成 26 年 3 月に刊行の『横浜美術大学研究紀要』に発表した。

(2) 平成 26 年度

平成 26 年度は、勝川派における主流派以外の相撲絵について研究を行った。これまでの調査から、勝川派の相撲絵には、時代ごとに春章-春好-春英-春亭という中心的な絵師の存在があり、勝川派による半ば独占的な制作が行われていたことが確認されたが、それ以外の絵師たちによる制作状況および様式はどのようなものであったのかを知るため、特に春朗期の葛飾北斎の作品に注目し調査を進めた。北斎に注目した理由には以下の点が挙げられる。

北斎がはじめ「春朗」として春章のもとに弟子入りし、相撲絵も手がけていた点
北斎が春朗として過ごした寛政期は、勝川派による相撲絵の様式完成期にあたる点

勝川派を離れた後も相撲の場面を描いている点

以上の三点をもとに、北斎による錦絵、肉筆画および版刻本の相撲絵場面を制作年別に整理し、同年代の勝川派の絵師の作品との比較を行った。また、昨年の大英博物館の調査で閲覧した春章の相撲錦絵の写しについても、その作者について引き続き調査を行った。その結果、同作は葛飾派の弟子による文化期の作である可能性が高く、北斎が絵師として独立した後も弟子の画技教育に相撲絵を用いていたことが明らかとなった。以上の研究結果は横浜美術大学研究紀要に論文として発表した。学外での活動では、太田記念美術館で平成 26 年 6 月に開催された「江戸の相撲と力士たち」展の作品調査に協力し、これまでの研究成果の一部を公表した。作品調査では、相撲博物館のほか 9 月に米国のボストン美術館及びメトロポリタン美術館に所蔵される相撲絵の調査を行い、作品データの収集・拡充を図るとともに研究者との意見

交換を行った。

(3) 平成 27 年度

平成 27 年度は、勝川派内での相撲絵の制作状況について引き続き調査を行うとともに、これまで収集した資料に基づいて検討を行った。特に勝川派内で最も多くの相撲絵を制作した春英の作例を重点的に扱った。その結果、天明初期の極めて早い段階で、勝川派内の先導的立場であった春章・春好だけでなく、春英をはじめとした若手の絵師たちも相撲絵の制作に加わっていたことが明らかとなった。また、春英は幅広い画題を精力的に描いた絵師であるが、寛政末期以降、次第に役者絵の制作を行わなくなる一方で、晩年まで相撲絵の制作を精力的に行っていたことが確認された。さらに春英の落款を付した相撲絵は彼の没後も版行されており、春英の相撲絵における名声を裏付けるものと考えられる。

平成 27 年度は、相撲博物館の所蔵品調査のほか、9 月にフランスのギメ美術館でも調査を行い、同年 11 月の国際浮世絵学会秋季大会にて発表を行った。また太田記念美術館にて 2016 年 2 月 2 日～3 月 27 日に開催された特別展「生誕 290 年 勝川春章-北斎誕生の系譜-」にて、相撲絵部分の調査および解説に協力したほか、論文を寄稿し、当該研究成果の公表を行った。勝川派に関する大規模な展覧会で相撲絵が単独のセクションとして取り上げられるのは初のことであり、本課題を通じて浮世絵研究のさらなる展開に寄与できたと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

大久保範子「寛政期から文政期初頭における勝川派の相撲絵に関する考察-春英・春亭・春和の検討を通じて-」、横浜美術大学・研究紀要 論文篇、第 4 号、2014 年、185-201

大久保範子「上方における勸進相撲興行とその絵画化」、相撲博物館紀要、第 12 号、2014 年、1-18

大久保範子「勸進相撲と江戸の名力士たち」、江戸の相撲と力士たち(太田記念美術館展覧会図録)、2014 年

大久保範子「北斎の相撲絵に関する考察-春朗期の作品を中心に-」、横浜美術大学・研究紀要 論文篇、第 5 号、2015 年、137-148

大久保範子「勝川春章と勝川派の相撲絵」、生誕 290 年 勝川春章-北斎誕生の系譜-、2016 年、168-175

〔学会発表〕(計 1 件)

大久保範子 「勝川春英の相撲絵について」、
国際浮世絵学会、学習院大学、2015年11月
8日

〔図書〕(計 1 件)

『生誕 290 年記念 勝川春章：北斎誕生の系
譜』(展覧会カタログ)、太田記念美術館編、
2016年

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

()

研究者番号：

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：